

東西蝦夷山川
地理取調記行

後方羊蹄日誌

多氣志樓蔵板



門外
267
卷

嘉周帳夷
陸又中
國初小
教廢桓
軍用却
如一戰
望定形
源氏東
征時人
傳九郎
此海軍
應神
清字
初請
肉附
桓衣
赫愛
如將
武冠
不
極
子
海軍



窮後及相。有民。兵。色。在。府。新
謹。朱。度。東。首。折。腰。服。于。誓。二。百
年。來。不。改。物。近。歲。小。秋。之。後。登。邊
官。急。報。侯。克。屏。護。更。遣。守。令。為
之。監。擇。水。字。受。擢。久。任。南。粵。在
出。律。丈。夫。生。來。猿。情。魚。務。具。情
魁。首。尾。河。足。之。慨。夷。向。首。通。美
步。一。國。夷。情。請。其。錄。子。急。海。物

同。如。屠。華。部。風。土。記。已。集。中。控
圖。畫。又。詩。句。共。是。國。家。多。用。書
熟。之。可。以。實。為。序。象。從。來。由。跋
卷。展。子。里。隨。讀。計。北。從。文。久。新
元。德。暑。星。田。節。江。都。枕。山。居。士
大。河。序。撰。并。書



...

...

...

凡例
知別と西極夷磯の縣より川上を岩内社田白と場不入交の橋場
外を地を後方筆跡と移し存る廣大なるを限りせざるを
お人等を雄岳と云ふ雄長と云ふ然るも川口は磯を以て余未
の夷磯を以て舟と云ふは遠く流るるを以て知別と云ふは
字部計はあり又志を以てしつゆの字部計は一字を以てしつゆの字
審し其林アタリ湖を以てしつゆの西岸を以てしつゆの源を以てしつゆの
本刻舟を以てしつゆの字部計は一字を以てしつゆの字部計は一字を以てしつゆの
然るも志を報し報志利子志と云ふも無き字を以てしつゆの字部計は一字を以てしつゆの
宜し其地所用地の時を以てしつゆの字部計は一字を以てしつゆの字部計は一字を以てしつゆの

凡例

知別と西極夷磯の縣より川上を岩内社田白と場不入交の橋場
外を地を後方筆跡と移し存る廣大なるを限りせざるを
お人等を雄岳と云ふ雄長と云ふ然るも川口は磯を以て余未
の夷磯を以て舟と云ふは遠く流るるを以て知別と云ふは
字部計はあり又志を以てしつゆの字部計は一字を以てしつゆの字
審し其林アタリ湖を以てしつゆの西岸を以てしつゆの源を以てしつゆの
本刻舟を以てしつゆの字部計は一字を以てしつゆの字部計は一字を以てしつゆの
然るも志を報し報志利子志と云ふも無き字を以てしつゆの字部計は一字を以てしつゆの
宜し其地所用地の時を以てしつゆの字部計は一字を以てしつゆの字部計は一字を以てしつゆの

然るに成木の委蒙函館府に

本知事河内ゆり不将候ニラツ越新道極平へ山を開葦の得失を定
換のしめ様を望氷の上忙四より入垣方次第にせり路をより東岸
よ越をえり居て峠より察観より極平に出る不将より列里地
之巻を幸偏と開路の可否一枚の地圖を府庫より納じ入るに記
合を要を換て一事を大抵を自辨の事あるに候はるの御事
程を密を聞かんと欲するはもと原稿八冊を候之風土人情社
開墾の可否也百見も一閱もよらん
安政六己未暮春於江戸身近杉並の五爪龍窟原に弘志候人

成後方羊蹄日記

伊勢 松浦竹四郎 著

安政五戌年正月十一日箱館府より往て東部 此のより不将候極平へ山
道所切開方の得失を換て候事候れ即日出入を力旅中一刀を餘の敷
を向ふに換て伺の事候事由有るに田某候君も白場ふりルベツ迄同
致し候事去林中に在る杜樹伐出方等も候致候事候事候事候事
此て支度出候事候事候事候事候事候事候事候事候事候事候事
一 劔應召募、裹糧出塞、関、險、河、皆、沂、涉、大、岳、儘、躋、攀、筆、不、洩、奇
絶、身、無、論、苦、艱、我、何、輕、性、命、此、役、重、於、山、

十八日正早夜校を埋め凍水にて凍令一泊既礫の如く馬蹄未通
 り路の幸旅言の及みより大地乾の本より廿一日越内も若き此を
 の人索一者の旅人何をもあし湯如先皆夷地出校入る者之を旅人半日
 江指より厚海部入エテ峠を越て若新村へ出るる者も此なり
 廿一日鷲鳴より園柵のあ搭人群をりせり何とも此処を切手を及びる月中
 十九日月中迄迄一日の人を一入る備るゆらきも紫菜もなき刃月利面
 凜然とて感傷も風星の異な成之エウラツ川を餘の河を越て望眺の上を
 此其も又沙磧も亦成丁ツ氷もより友人雪路子の鯉向も半分も氷も減
 りや穿る痕も此地の風土を吐けりも互あふ夕カヲシヤマントも若き中海陸
 を願ねも一條の様そのやよくと人か路をあり実も目受とすおらり

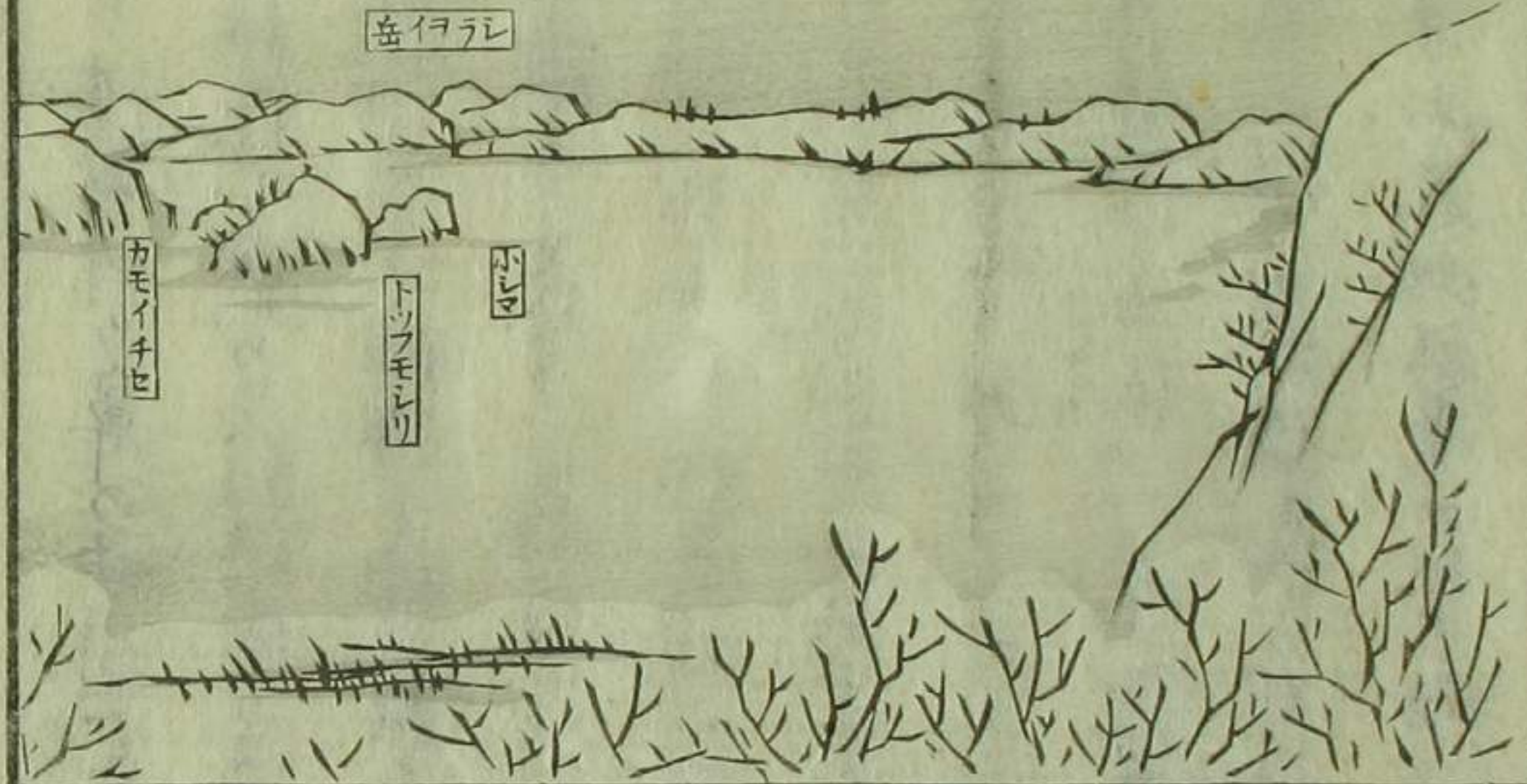
廿二日貴到静新各様を美山々熊九折き延沼樹梢を踏て雪之は然も花
 氷埋て映も亦成る故よりなりも半よりサ一也ました短も亦て成夜も雪もふ
 隣の道き山里の詠も思ひありてりりもふゆも美馴も不様も折も就令會も
 以り厚しりり餘程水入て礼文本のときも忘る如清を輕輕とくも在る
 廿三日雁舟で龍河より翌日湖を一見一白會も美也
 廿五日雁舟入十二名三田君と同よラサルベツより樹乃より入るも凡武里
 して龍川こころも瀑布凍令一氷箒を垂らるも玉簫も響るるや
 主裏も一條の花泉あはるも水笈も遠徹一目も是も映映一も其も新上らる
 やく恰も就池も怪しん又是も厚厚氏も足あつる時不動影向の籠も
 号るらん水の凍令もあきも亦平日の觀も是も一も其も是も又フカウニ

三

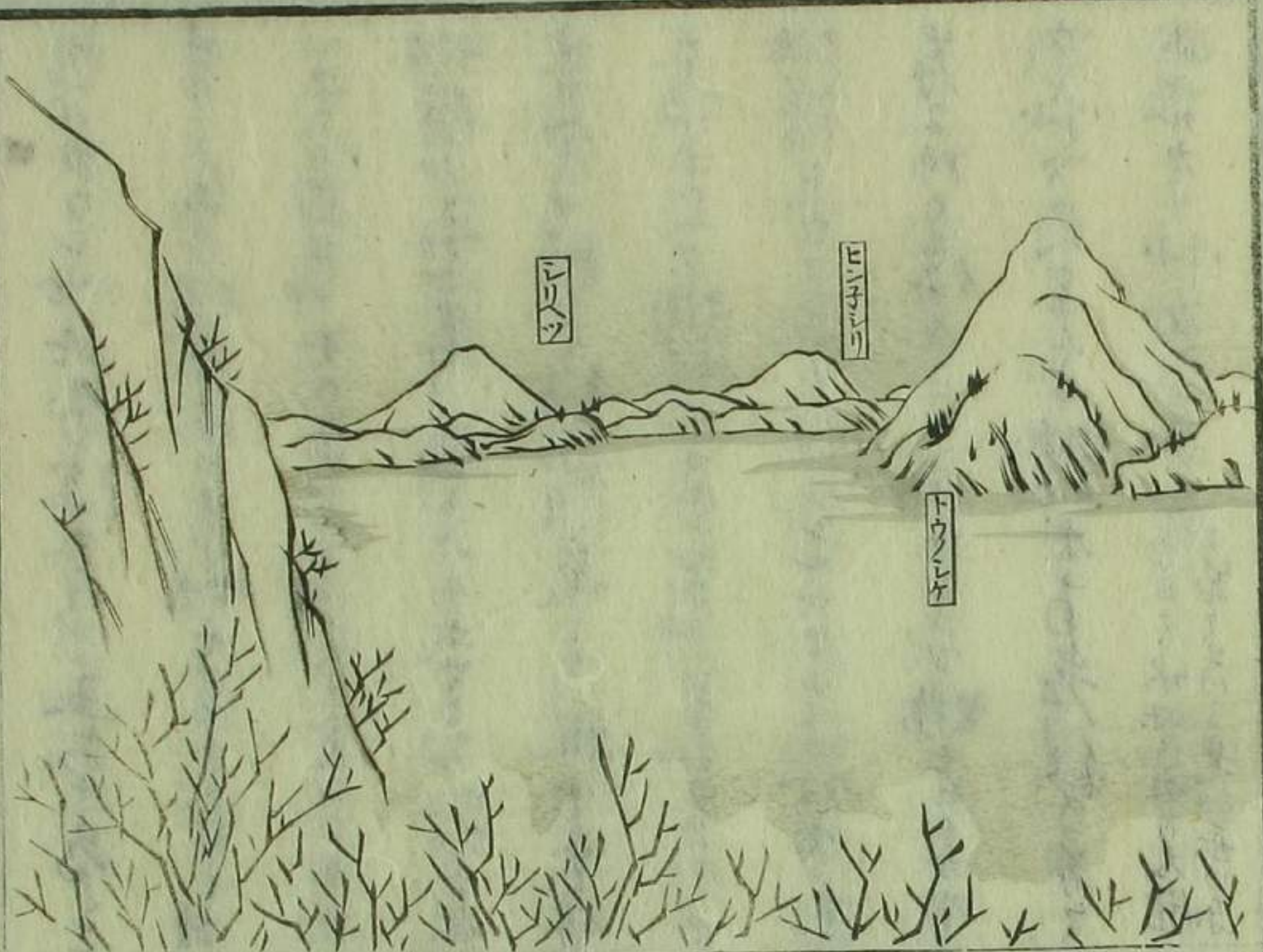
二月朔日快晴冰雪破のこゝ廿五トウフルカノ利里帰及此岸トウリ長
 を建んるを舟人へ後を此所を向う長たりはへロキウハニ岳有肩を
 塔りゆ白嶽の烟を舟中へ入るまきや何れも思ひや半志十全
 一同は席を履し藉是より近りわくし須臾は湖傍トウヤより危きり少
 曲し木との右岸に移りたて依て舟を止る舟人の心を慰めておかしさを
 舟場場舟場場見ぬの舟場場と云り是向岸は後舟を備置ふあらしして号し
 千ホヤウレ舟場場西岸西岸
 湖沼の周捨に甲余を水を白のソウヘツは首ヲサルツと遊遊湖中四ツの
 島ありトウノシケモシリホソモシリトウノシケモシリ 舟は己の杖四島を廻りしを湖中島を形も
 雷益をもたせりややくし舟中余テ頂上は一ツは法泉とて水も湧りて又異
 も湧れりし舟人は水を作水とて舟中余テ頂上は一ツは法泉とて水も湧りて又異

寛文年有徳妙竹々鼻の僧圓堂と云ふの法園の寺山をとり毎に鏡を
 挺を携へて佛像を刻りて後日園は後日太田山ニユモキ儀をエウバリ恵山垂
 舞山越内社社寺々を佛像を彫り納め後此島は年久未だ住居しと極くは奇
 瑞を象り觀音の像を二尊作り一体をレブシゲの産屋産屋に納め一体を此島小安
 置し老て後徳妙寺に納り江州伊吹山に入寺学究と云ふ處に入定せしや
 其此寺より釋加すゝ密の相高き尊極し其佛像能くあれ其處は
 中々まきし非丸のユウとて寺住の寺とてまきしむあまトツラモシリ五丁是は一條の
 陸を縁きり又南よ小島トウノシケトツラモシリ五丁是は一條の
 禁裏之四忍と沼中島之嚴島神社を建んるを縁き多くは松費を
 以て建ししと云ふ此傍景の地中島一區の名勝と云ふ目出度しと云

粒食不
後慕
腥羶
陋俗方
隨
皇化遷
期者
羊蹄
山下路
滿犁
膏雨
壑春田
昔和

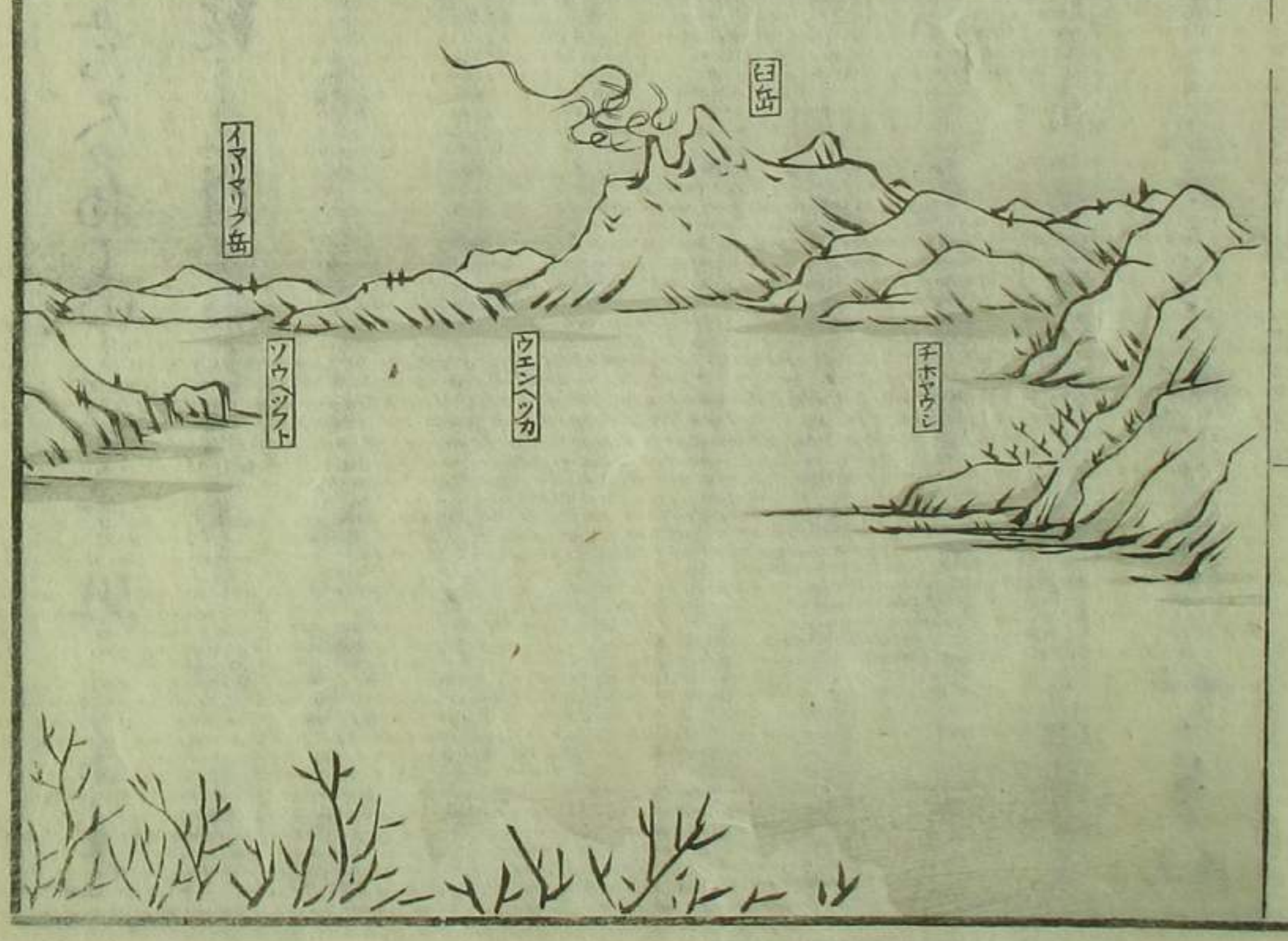


受り由中難極陰木以異州多くあり
ハルリントウツルリントウ
石籠後蔓花後黄連やちやう米蘭金
ヲモタカ
鶴御細辛翁鶴州を餘名も志す如也
出立又小鳥多く主形耳目に訓き物あり
イセホカイモラカセクル
牛之免貂狸華錦尻多一性昔麻を
放り由あり直よを遊り油を煮るとや
湖中桃花魚杜文魚泥鰌塘鰌鯉魚
多又鰻は似て大さ舟のや魚ら昔
麻を煮後を麻の角と破れ所は就
の鰻子口は横入りと云はれらるる小き
チカウレチ



吾い尺の物も時を以て遊りあり是
鏡より一様別の物此魚シツツコウツクス
と由ふのこふふ有く相此湖水は何故
中ん此の張るる舟は極美の地何もの
湖沼とも春月より二月迄も湖上土人は
往來舟を古先の往よはぬ水の時と
土人も凍死魚鳥も凍死魚の卵皆凍
枯るる所翌年の魚やと鐵籠と云ふ
實もと魚は相舟を此度い由の小を
まゝ小子一シト戦ハツ子シリ小ホロイ大

マツカウシ此の山は深きく五の千石を
有と云ふ并タ子シレト思セトエトシモイ
レフニエンルン岬キウレエンルン岬ヒイレユントウヤ
此の山は深きく五の千石を
茅舎二軒と云ふ是も眺望の時
て并ホロへツ中ホロエンルン岬ケナレヒリカヘツ
係フルホトウフレイタイ川ニルレウレヘツ川字
岸はあり併いニセリウシコツ壺チヒイカリ
ウレハソウヘツチヤロ橋のオノオノ舟并
ホニルカリ川ウエンベツカ平日の水は毎日大能
なるは白岳の東



此の山の東岸より赤松新産
樹木や朽ちて唯角々たる危い山
方竹頂は赤松燃出其雲百子の雷
を裏やし湖を隔て是を原む風
京草多の及不処や其後を仰る
羊蹄の巔青天より立其形は怪
士のや須臾も其勝景よりして佇ま
い人彼岳の雲をくち指さるる去秋
麦とて常雨をくちくち雨は万
蹄の頂より及下る有り時徒然よ一



東園評多
悉志樓於
遡洄窮源
可謂盡心
焉耳矣而
此行也臨
崢嶸不測
之深繩索
相引亦有
如超縣度
之險者古
歌曰三朝
三暮黃牛
如故言上
峽舟行之
難也太白
亦曰三朝
又三暮不
覺鬢成絲
水行之難
可以見矣

表木幣而去

三日宿樅原此地登雌岳既二分許煮雪作粥殺貂為炙立木幣而拜岳山中巨樹凍裂如地震終宵不寐漢和名鳳尾松四日天未白著鐵楯而攀登四分日漸出九折而進刀風刺面然汗流浹背愈知險難天色已晴惠山駒岳白繪鞆白老皆在襟帶之間登六分無樹登八分險愈甚步愈艱午後漸達山巔巔如富岳巔而凹周廻一里半許冬日熊蟄凹中土人待春而獲之云余時促歸故不能獲一頭願從行者如有恨色四顧則混保在西岩內興市古平岳在北支骨察繩垂舞岳在東南而松前江指函館之諸山出沒於雲烟之際寒威透骨不可久留

藉蓑帽蹲踞而下日暮達昨宿處

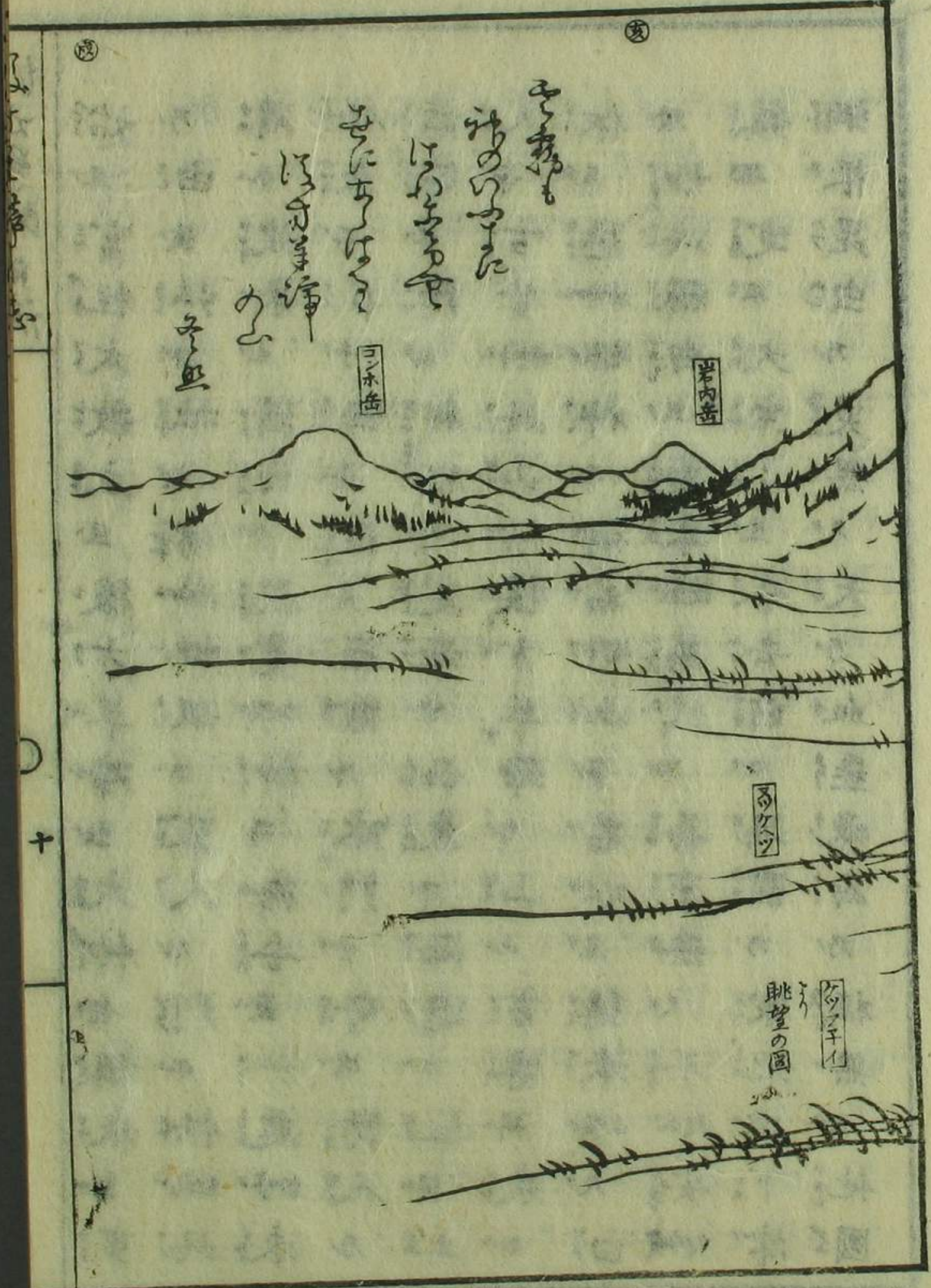
五日取路於摩渴利別源又相後方羊蹄之祠地日暮抵路參蓋知別西岨也抵柳多宿漁舍蓋去秋所過之地也

此處極其長而烈其風也又平之吹第の起よ烈をわく
志く懐くしつる諸島社々首限りのふま首今つる敷度幸として摩
渴利別源の原よある此水亦年々法泉湧く痛出たり少人は是を神カモイツカ
云傍よ小山とつ得ひらるるをよエナラを連て一其の悔懐を祈り及乃羊

歸社まじつ建人と後土人は後り恭く一枝の祭文を後上なり
野作國磯屋縣志利邊津川乃水源能大山和敷坐
須神乃前白久今年安政乃五年止云年此處ル

山ノ下

九



眺望の園

始宮柱太敷立且後方羊蹄能大神登稱奉留事
 乃由波弘伊拙及劣此毛礼反尔家人乃列尔任此
 國尔渡来互國内乎歷覽尔流乃御舍波一カ處尔未
 仕奉須在平海美惜美箱館乃氷門守流防人乃
 頭等尔請成神祠乎定奉利西東乃海邊尔任留土
 人等古昔利此山乎後方羊蹄乃山止言傳開来尔
 依豆恐此此毛礼神乃御名以豆稱奉此蝦久白
 須如此稱白豆齋奉波萬代尔易事無久平安
 鎮理定理大坐今去前毛此國乃家地波下津
 網根昆虫乃災無久天乃血垂飛鳥乃禍無久他國

利相敵境乎侵須事無久凌侮物掠留事無久
 國人大海原尔舟漕回豆魚漁為變鱮乃廣物鱮
 乃狭物乎佐和佐和尔引寄上山打積置年事波横
 山乃如久海幸令得賜此高山短山乃大峽小峽尔
 繁立留荒草木根芥掃比高田湊田乎壑利五穀乎
 取作娘惡風荒水尔不相賜八束穗乃伊加志穗尔
 成幸開賜比饑事無久凍流由事無久夜乃守日乃
 守尔守惠比幸賜岨言壽支齋奉娘久伊勢國人松
 浦竹四郎源弘恐美恐毛白須

字根太... 建人心... 神... 守...

才... 日...

山ノ新編

是より路冬 西ノ一王旋岳の事 又よりまてツの小山を越柳多に到り椽全の宿

六日同雲慘淡とて風も悪人を辨せ依て停宿す山人オ大を曳て山入狐

武正親二足親一足を曳て山入の依り中ノ椽は必を雄雌を有るより其

を扱て朽木大樹の根に任む故あり一足をたつ時をも時を計り又一足出ると云

七日黎明に散る所の氷上を越る望氷既融んとて処豊破り歩り

略吹とて音もなきつゆゆりも云々一歩岸にたてて去り

山川を氷の底より音もなきつゆゆりも云々一歩岸にたてて去り

ツツ成巨岩怪石簇々として下の中より有十歩さてヒニハツタラ測此を数里の

平系足通くと云々一ヶ團の廣衰らるといサセてキモウヘツ

て山を分け入る扱て難木系少くともふらぬ椽もろく針は東より南

本川を見り南に入ラロウエンリヘツ西シマニリヘツ椽の二ツよ

纒岳の西の林業に到るをり西岸城を中より山をのりて注昔あり

を原を新め若かり余を杖始てを原を新めはうの方をまらツの原

椽を数丈とて喬木終に椽を山をのり一団の跡を認り又一歩を

過す時を平に候るを音辛なるを音然とも是より山嶺ある故風

は大に極よ成り年及チライヲベツ キモウヘツ としてヘテウコビ 此 石の方を案纒

岳に到ると案字をたう段に入ると案 樺多 タツウシ 地 是より山嶺を極

此をより椽を又とて此ふとて宿まんを椽皮を剥んとまんを束と木凍

て剥粒に依り枝を以て風露を凌ぎ雪を踏築り此上より木を解り上の崖

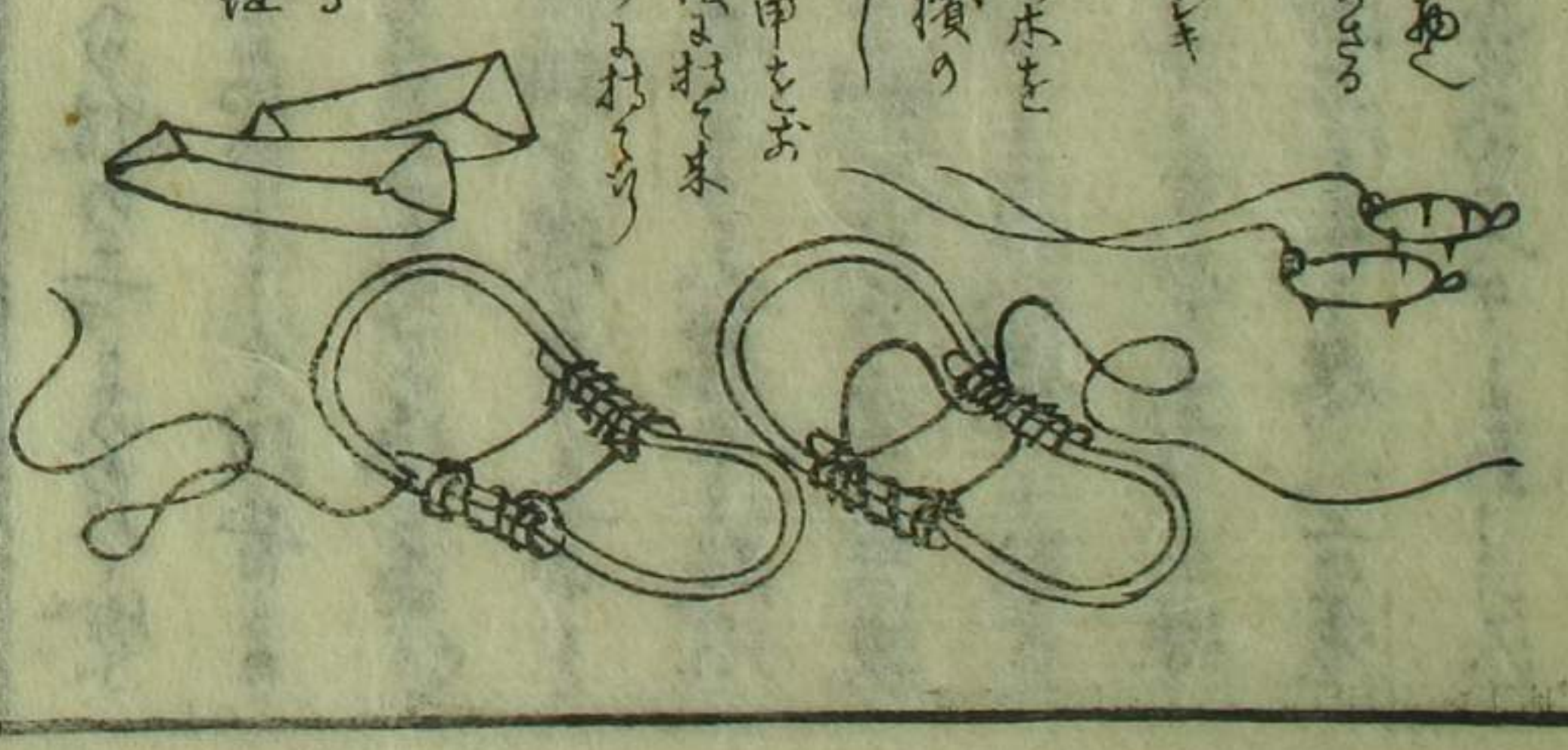
を崩し土を走るとんを爰火を燒りてを爰爰を爰ののりよわ

依て主人等中止宿ふと定む時
 産林成ふと土のりも定むと申す事
 是等如踏進む一炊の火を燻上成程
 八日收時極なれば山より下りて
 込て赤坊持を袖にふらぐて上り
 云く木の牙は天狗長^{サツホロ}長^長たうワツカタサ
 長^長つさきとてうらあうらまう以下
 予を極揚くと規^{ツミ}のやうに足人もか
 七日を中々味を減らさるるも思は
 未の時刻をよまねとも一宿せんと

桐 幾と作らぬ
 水香の上とらる
 桐は月也
 表す カカシキ

桐^{カシキ} 葉の木を
 以て他と異し海積の
 皮を細く切て附
 木のこまを紙の甲とて
 の敷ひもてまきははは
 舞は舞中てまきははは
 まちをわら

沓^{クワ} クリ
 麻の豆皮と作らる
 中へ石を詰めし鞋
 の皮も作らる



の下をト子ハク^{コフ}檢^{ケン}の^ノ程^{ハジメ}とてかき雪を崩さよ一の穴を率^{イサ}とて二足の
 獵犬を入りよるて奥深き思はれり^{カク}其の奥穴より洞口を崩し見ると
 竅^{カク}の産屋は合へず降枝^{カク}とて兼て其の住居なり内なるうらまは穴とてや
 と思はれぬとてぬい愛を海へ用さうと名産よ一筋を戦とてな
 追々行路入雲烟糧盡山中憶悄然千島熊踏耳曾熟雪崖認
 跡口流涎

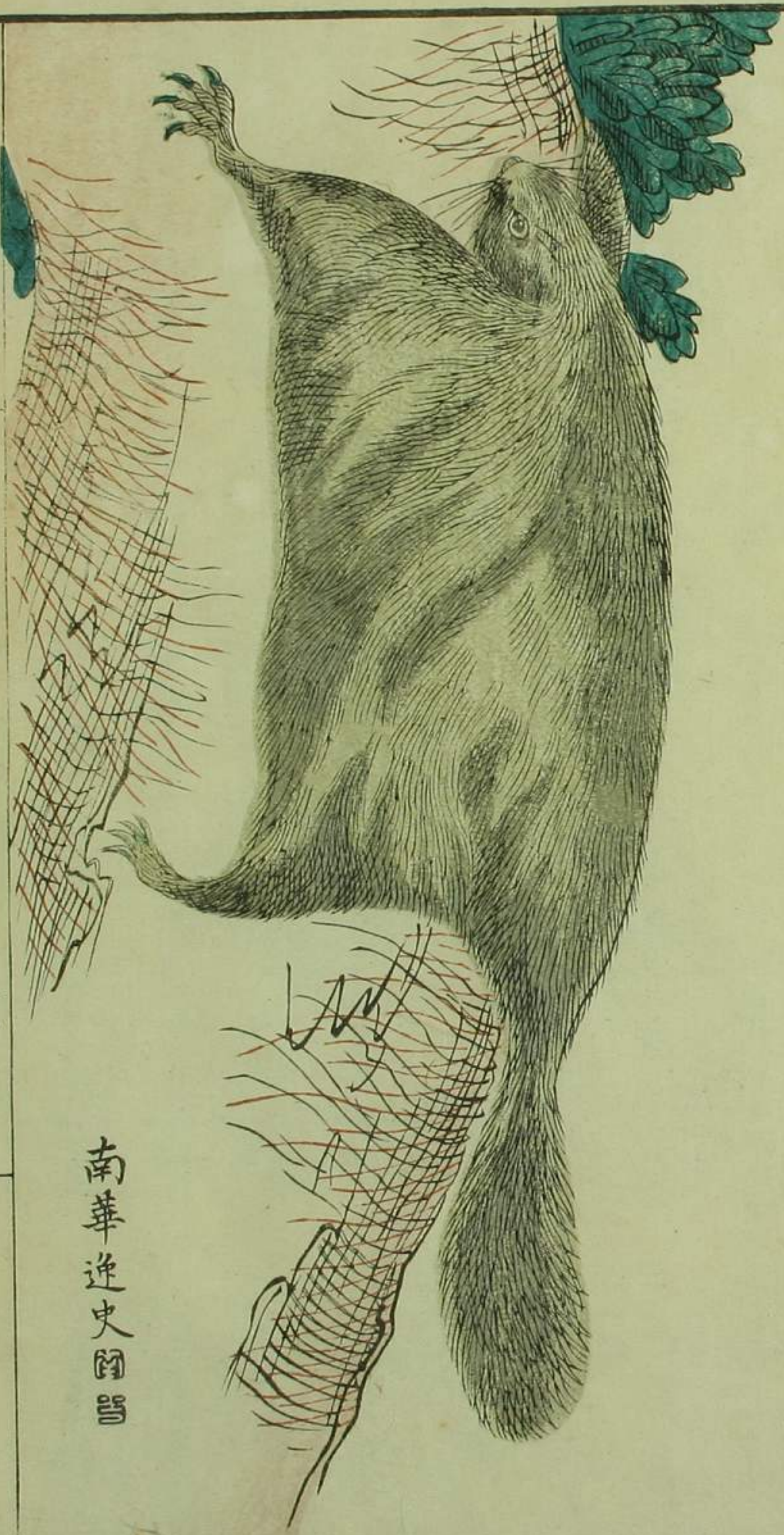
一同の者何れも書^ミや^ミ同^ミに^ミ故^ミに^ミ其^ミの^ミ言^ミを^ミ申^ミす^ミは^ミ皆^ミ
 君^ミを^ミ程^ミに^ミ喰^ミわ^ミく^ミ何^ミを^ミ獲^ミて^ミ喰^ミは^ミす^ミと^ミ我^ミも^ミ又^ミ四^ミ人の^ミ志^ミを^ミ持^ミて
 山^ミより^ミ夕^ミ方^ミ程^ミ四^ミ足^ミを^ミ取^ミり^ミ帰^ミり^ミ来^ミり^ミぬ
 九日也前日風雪あり我の屋中へ休む主人等山へ又程二足程と定む

シヤチリ アツケシ アヲタコタンノホシタ 西に於て
 方言 ウハチチロヌフ クスリ 皆之を
 大さ五寸細く長くして触れしを驅る
 疾くして飛ぶ如く將として其を解す
 時と白く成ると其色は白く其毛を浪
 氣にあぶると浪氣は其毛のうろこは
 異る余は是を跳兒 北征 といふは兒の
 乳を中へ飲らば白く成ると灰毛は
 何れも是か人識者の考をまわら

志は絲はみ カシ 夫言 ルウチロヌフ 東部 エシラチカ
 号場所 カセケル 西に
 毛中 ノ 序毛 あり 木の枝梢を伝ふ 籠籠 より
 も 好 好 す 木の皮を喰ふ 是 華錦鼠 馮 籠
 鼠 雅 石虎 細 珠 字 是 は 常 る といふなり



南 溪



アツポウ 方 言 是 鼠 氣 の一様 く 思 は らる も 大 は 異
 一 は 括 本 の 穴 よ ほ み ふ け 柔 弱 な の 毛 も き ら ふ べ
 わ く 余 は 粘 の 者 と アツケシ の 毛 と ニ ツ と を 混 せ り

南華遊史圖譜

跳免^{シヤチリ}一足もたれぬ^シゆりし^シ其の^シ踏^シを^シた^シり^シ何^シ近^シく^シな^シる^シを^シや^シぬ
 十日^シ收^シり^シた^シり^シた^シり^シ其の^シ足^シを^シた^シり^シ一回^シ又^シは^シ収^シひ^シを^シ思^シて^シ岩^シ谷^シの^シや^シ
 大木^シの^シ根^シは^シ何^シら^シた^シり^シた^シり^シ余^シも^シ二^シ三^シ十^シ万^シも^シ言^シき^シよ^シ上^シり^シ傍^シ観^シを^シた^シ
 一回^シの^シ者^シ穴^シの^シ口^シより^シ木^シを^シ切^シ是^シを^シ差^シひ^シて^シ其^シ中^シを^シ無^シり^シ吼^シる^シ大^シの^シ前^シを^シ
 収^シひ^シ尾^シを^シ振^シひ^シ二^シ足^シも^シ狂^シひ^シと^シ穴^シの^シ内^シへ^シ入^シり^シと^シ捕^シ獲^シて^シ毒^シ茶^シ
 三^シ四^シ散^シり^シや^シ然^シと^シ色^シ々^シ嗜^シり^シて^シ洞^シ窟^シの^シ窟^シより^シ怪^シや^シ妖^シを^シ言^シひ^シり^シや^シ
 穴^シへ^シ大^シを^シ追^シひ^シや^シ其^シ毒^シの^シ瞑^シ眩^シを^シた^シ喉^シの^シ怒^シり^シて^シ飛^シ出^シり^シト^シ子^シシ^シバ^シク^シト^シ飛^シ
 攫^シ付^シり^シヤ^シト^シ子^シシ^シバ^シク^シ脚^シを^シ踏^シり^シも^シあ^シく^シ何^シと^シ此^シへ^シウ^シレ^シホ^シめ^シく^シ兜^シ其^シの^シウ^シレ^シホ^シと
 母^シの^シ首^シを^シ腕^シに^シ抱^シき^シ互^シに^シ力^シを^シ競^シり^シふ^シえ^シ楯^シ大^シを^シ収^シひ^シて^シ吠^シて^シあ^シい
 啖^シ付^シり^シ然^シも^シ力^シを^シ失^シひ^シ衰^シへ^シ戦^シ栗^シを^シ吼^シり^シト^シ子^シシ^シバ^シク^シ山^シ籠^シを^シ抜^シり^シ

液^シ下^シり^シ胸^シ膈^シを^シ刺^シて^シ突^シり^シり^シも^シ子^シ孫^シ実^シに^シ感^シを^シた^シり^シ條^シと^シ此^シト^シ子^シシ^シバ^シク^シ
 を^シ毎^シ年^シ七^シ八^シ尺^シの^シ點^シ置^シを^シ獲^シ頭^シを^シ獲^シり^シも^シ名^シを^シ得^シり^シ此^シを^シ阿^シ山^シの^シ中^シの^シ子^シ孫^シ
 を^シあ^シげ^シし^シつ^シり^シ今^シ度^シ百^シ連^シ来^シり^シり^シ何^シの^シも^シ忘^シる^シま^シ時^シ一^シ回^シの^シ者^シ鯨^シ波^シの^シ
 舟^シを^シ扱^シて^シ収^シひ^シ先^シ舟^シ一^シ肉^シを^シ切^シて^シ山^シ海^シの^シ神^シを^シ供^シへ^シ皮^シと^シ肉^シ半^シを^シあ^シ板^シの^シ窟^シ
 中^シに^シ圍^シひ^シて^シ先^シ鮮^シ肉^シを^シ成^シる^シを^シや^シ或^シを^シ炙^シり^シ拍^シり^シ十^シ分^シを^シ吹^シれ^シて^シ其^シ味^シを^シ
 与^シり^シ特^シ各^シの^シ髻^シは^シ腥^シ血^シ凍^シ令^シり^シも^シ血^シは^シ凍^シ顔^シ色^シ惨^シも^シ画^シ鬼^シの^シや^シ忍^シり^シ
 皮^シ松^シを^シ成^シり^シ根^シ系^シを^シさ^シり^シ五^シ山^シ倉^シ崎^シと^シと^シり^シ上^シり^シ程^シ一^シ故^シは^シ誤^シ換^シを^シ無^シ
 杖^シを^シ横^シに^シ突^シ是^シを^シ找^シや^シも^シ構^シと^シ善^シ提^シ杖^シと^シ計^シを^シ構^シも^シ風^シを^シ靡^シれて^シ皆^シ種^シ
 ぐ^シり^シて^シ四^シ樹^シ木^シも^シ絶^シり^シぬ^シを^シ収^シり^シ西^シの^シヲ^シロ^シウ^シエ^シシ^シリ^シハ^シツ^シ岳^シヲ^シサ^シル^シハ^シツ^シ岳^シト^シク^シレ^シヲ
 ニ^シハ^シツ^シ岳^シ知^シる^シ混^シ保^シニ^シ子^シシ^シリ^シ岩^シ内^シ岳^シを^シ入^シり^シ風^シ烈^シを^シ受^シり^シ以下^シを^シ時^シ々^シ起^シる^シ

くまのしん

ふりかへりて

花乃那
大なる
かひの
あけ
あき
あき
あき



探齋



探齋
一
印

ふらふら松島に玉極此をくもを吹拂て望み来まき歩み能まふも
るるるまき上りや廣平の舟に到らん大志うまきりと思ふまき物の有る
さうり近付らんは皆五板の橋に舟の海かぎりし故まき近し諸如
のわく徳道も首入るふらふも吾も何れもまき風を何れも定まら
細風の如くまきを被揚一面に吹る如くは足を思ふまきあり口を掻き
粗くて遠く吹るまき思ひおも忽晴く忽吹くまき愛宕の空りまき
さうりな余も通るふら烏帽子の政の如きまき下り敷百丈の政崖一ツ
まき倒れたるまきなまきなるまきまき政崖をたてりまきまき戦慄し今
如き危おまきまきなるまきまき何れもまきまき中へまきまき政崖を
何れもまきまきなるまき起つ時川子にまきまき思はくはこまき

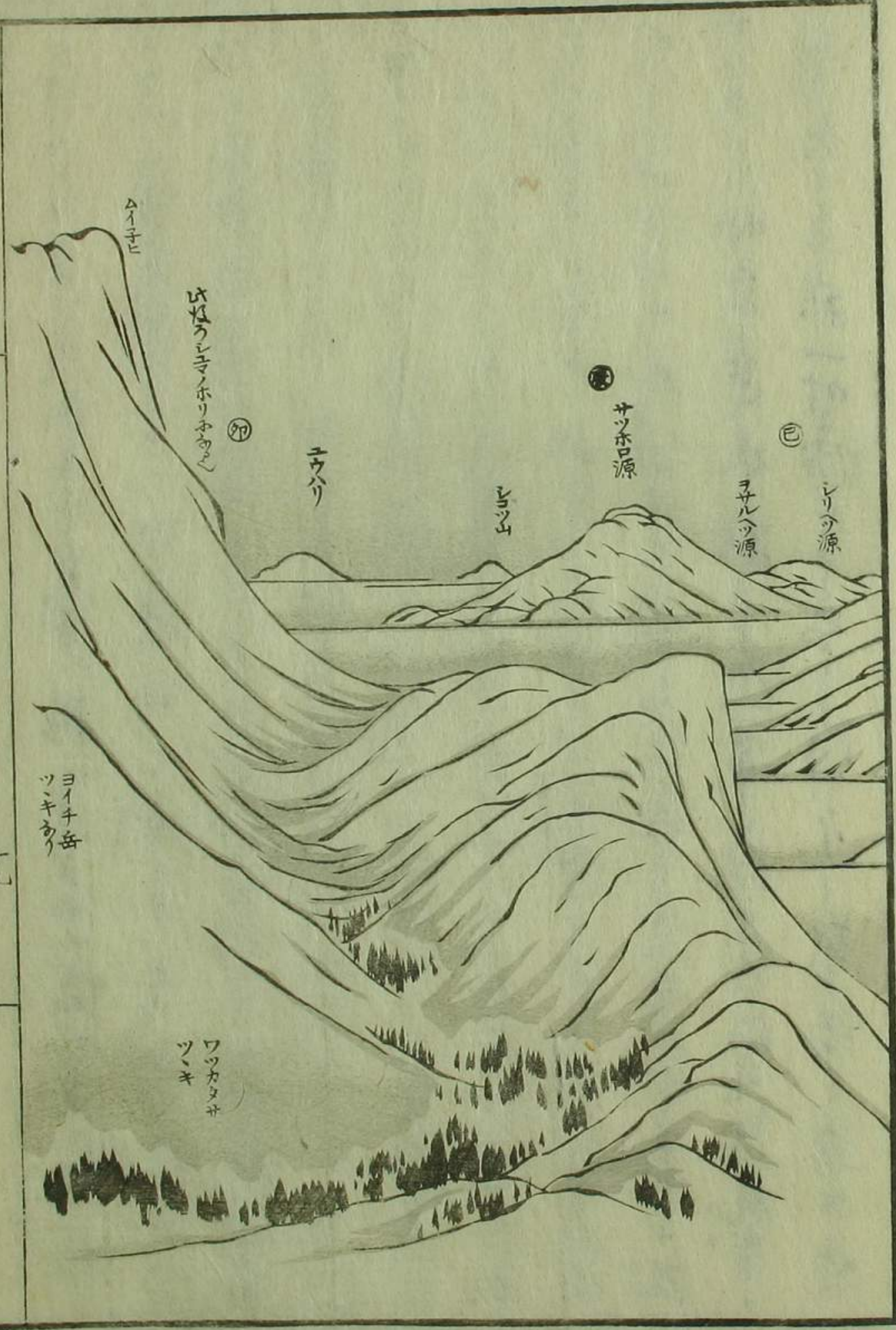
此^シも何れもまきまきなるまき月之の木幣^{キナ}をまき伊勢兩皇太神并大
日本領夷熱國中大小の神祖をまきまきの山盡此度の山越をまき
め賜へ此及ん此の新道成就の時まきまき一社を建て永くまきの鎮守に
まきまきと身柄を抽て一こまき思ひく白く政を奉るは同まき時まき
まき^{ヨイナ}四方を眺望まきまき子の心針まきまき子にまきまき
まき^{シユンカン}方よ不将の平野果もまきまきを越く増毛岳^{マシケ}岳ハマシケ岳シヨカン
リカ^カボ^カまきまき物の方よ突出まきまきまきまき^{タマ}ユウバリ岳サルボク
の山く己年まき
親岳もまき^マ天狗岳達もまきまき^シ白老アソイワ字^シ波沙の如く
一まきまき^シ万よ又まきまき^シの如きまきまき
まきまき^シと通し^シ山^シのたむまき^シとた^シ天^シまき^シのまき^シか^シまき^シ

雪敷を水派山脈の足邊を付式に百方より休む一日の志余に向て
 是は君をよむ物なりと天風やけ先の子を屬し語りて是故に日
 如く風をよひて此山越えし時を必す日和あり先の子を語りて
 何れ彼も心快くし深く我を戒めおぼしむを捕まへて大船を沖津を
 是れ先の日記を言ふ事と船夫をよむ事とをわたりて其の利に同し
 是れ相争らるる木立系板橋の險不十余可坐るまわらぬの遠く風の中
 小橋をひらき宿る如く骨の乾きも鮮肉を喰てまを食ふてははるるなり
 鳴箭飛鎗勢已遮豪羅一怒震天涯毛人自存傳家毒鮮肉今
 宵到齒牙

十一日夕刻をわし小倉の船より目を開き最下層の別室に用き敷圍は

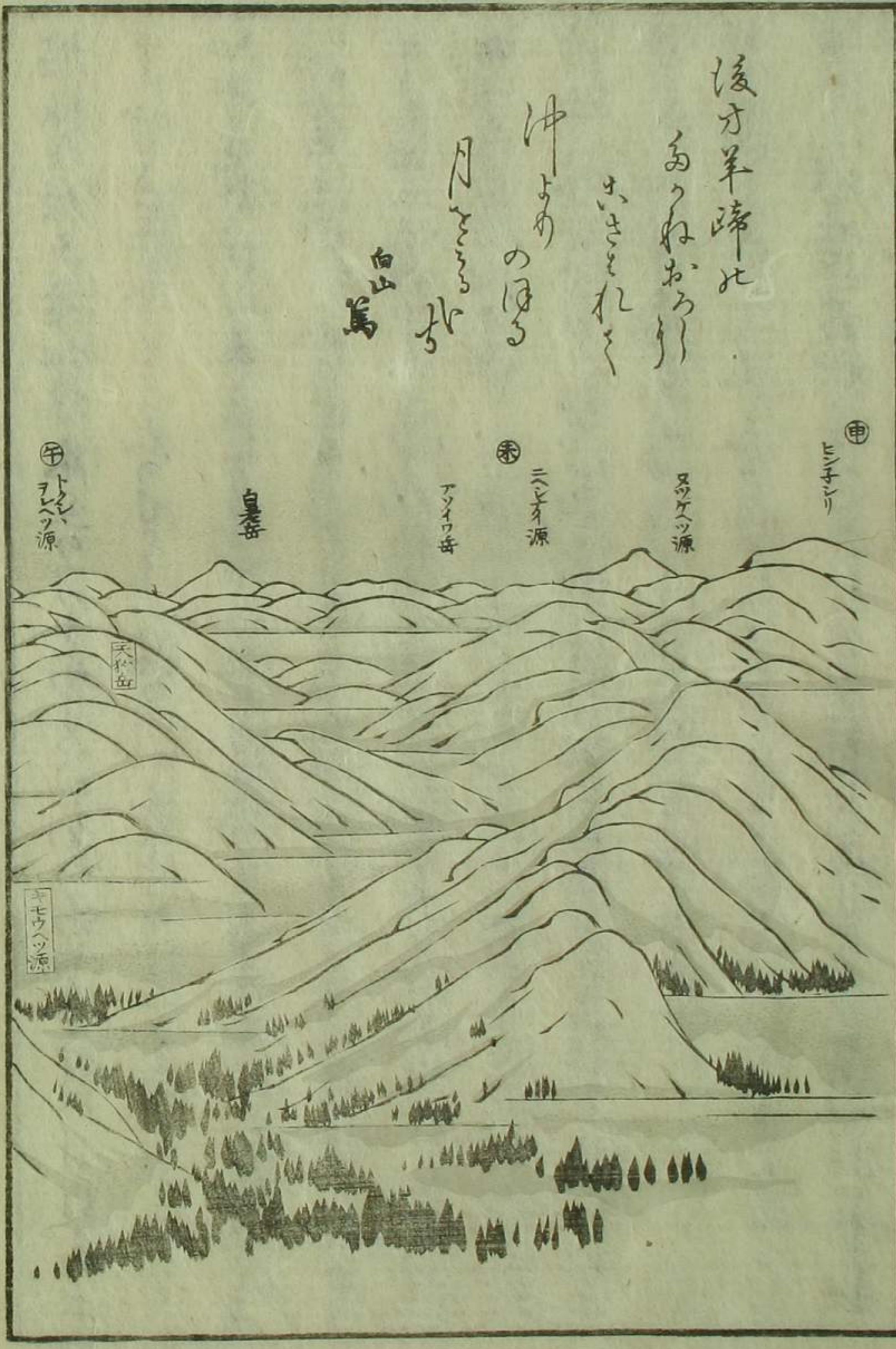
板橋表松本板橋橋木立のつるをわたり一面のゆきをば埋りてなす上
 中へつる返来りては木のちりり一箇の川に最下層ニケレを川をわたり大さ
 板橋も埋りて踏むを先師を建て五日振るとおもふ事なりシリハツクは道
 初末も始りて水の炭まらりて悟らぬ板橋中の空をまはす苦味あり板橋
 中を歩くと同一なるは是も板橋表松本の山をまはす苦味ありカシヤシ
 板橋の有る山の水は甘美なりとありて板橋の山の水は何事板橋
 ともてつてさるるがうきをわたりて人をもはれぬ此の山をまはす苦味あり
 のまらりては木立種々土人の方をも益を得しりてなり
 是を將て此川の名をひらきハママツと云ふ木の木の川をシケレニウシ
 云々一姓身近友重某津の橋より京鏡の川をシケレニウシの川に此の助を載

後方羊蹄山



十礼

後方羊蹄山



ありし余り此度就きしと同一筋ありき由乙名ルヒヤンケツイン
 一
 ころし時と不将士人十二人を連しし^{キマヤ}余り十八九才の時と有し
 餘の志も皆死て余一人残るのみとを言はずも不将より託田へ新道を切
 らんと載てるし^{ニウシ}わくく^{ニウシ}主切方の骨尖を獲て後一具あり
 相川^{ニウシ}ニウシ^{ニウシ}ハ^{ニウシ}両岸を越し^{ニウシ}経路^{ニウシ}を^{ニウシ}行^{ニウシ}へ^{ニウシ}わ^{ニウシ}水の上を^{ニウシ}年^{ニウシ}近^{ニウシ}下^{ニウシ}り
 幅十餘百の川よ出より是察鏡の^{ニウシ}川あり氷の上を越え^{ニウシ}西岸を赤
 も貴を或も金銀の画山^{ニウシ}も^{ニウシ}怪^{ニウシ}す^{ニウシ}大^{ニウシ}岩^{ニウシ}壁^{ニウシ}と^{ニウシ}そ^{ニウシ}下^{ニウシ}り^{ニウシ}新^{ニウシ}道^{ニウシ}東
 岸^{ニウシ}に^{ニウシ}サ^{ニウシ}余^{ニウシ}テ^{ニウシ}ワ^{ニウシ}カ^{ニウシ}川^{ニウシ}の中^{ニウシ}に^{ニウシ}烟^{ニウシ}の^{ニウシ}を^{ニウシ}見^{ニウシ}認^{ニウシ}り^{ニウシ}立^{ニウシ}寄^{ニウシ}り^{ニウシ}ん^{ニウシ}ん^{ニウシ}ん^{ニウシ}温
 泉^{ニウシ}沸^{ニウシ}り^{ニウシ}噴^{ニウシ}上^{ニウシ}を^{ニウシ}走^{ニウシ}り^{ニウシ}氷^{ニウシ}も^{ニウシ}融^{ニウシ}れ^{ニウシ}る^{ニウシ}一^{ニウシ}宿^{ニウシ}を^{ニウシ}過^{ニウシ}り^{ニウシ}温^{ニウシ}氣^{ニウシ}能^{ニウシ}く^{ニウシ}肌^{ニウシ}膚^{ニウシ}に
 透^{ニウシ}り^{ニウシ}数^{ニウシ}日^{ニウシ}の^{ニウシ}雪^{ニウシ}外^{ニウシ}一^{ニウシ}寸^{ニウシ}は^{ニウシ}消^{ニウシ}え^{ニウシ}り^{ニウシ}思^{ニウシ}は^{ニウシ}し^{ニウシ}は^{ニウシ}り^{ニウシ}改^{ニウシ}を^{ニウシ}奉^{ニウシ}り^{ニウシ}喜^{ニウシ}市^{ニウシ}岳^{ニウシ}の

山脈遮^{ニウシ}遮^{ニウシ}と^{ニウシ}て^{ニウシ}あ^{ニウシ}り^{ニウシ}心^{ニウシ}懸^{ニウシ}き^{ニウシ}を^{ニウシ}走^{ニウシ}り^{ニウシ}實^{ニウシ}は^{ニウシ}奇^{ニウシ}と^{ニウシ}て^{ニウシ}相^{ニウシ}聖^{ニウシ}朝^{ニウシ}起^{ニウシ}て^{ニウシ}被^{ニウシ}り^{ニウシ}し^{ニウシ}温
 多^{ニウシ}を^{ニウシ}見^{ニウシ}ん^{ニウシ}温^{ニウシ}水^{ニウシ}の^{ニウシ}蒸^{ニウシ}氣^{ニウシ}も^{ニウシ}濕^{ニウシ}り^{ニウシ}氷^{ニウシ}も^{ニウシ}軟^{ニウシ}り^{ニウシ}あ^{ニウシ}り^{ニウシ}温^{ニウシ}氣^{ニウシ}能^{ニウシ}く^{ニウシ}肌^{ニウシ}膚^{ニウシ}に
 透^{ニウシ}り^{ニウシ}

垣火をほあを^{ニウシ}人^{ニウシ}の^{ニウシ}心^{ニウシ}に^{ニウシ}し^{ニウシ}を^{ニウシ}雪^{ニウシ}の上^{ニウシ}に^{ニウシ}旅^{ニウシ}を^{ニウシ}す^{ニウシ}る^{ニウシ}なり

^{ニウシ}察^{ニウシ}鏡^{ニウシ}の^{ニウシ}源^{ニウシ}の^{ニウシ}水^{ニウシ}は^{ニウシ}シ^{ニウシ}ケ^{ニウシ}レ^{ニウシ}ニ^{ニウシ}の^{ニウシ}二^{ニウシ}段^{ニウシ}あり^{ニウシ}上^{ニウシ}は^{ニウシ}カ^{ニウシ}モ^{ニウシ}イ^{ニウシ}ニ^{ニウシ}セ^{ニウシ}イ^{ニウシ}と^{ニウシ}て^{ニウシ}流^{ニウシ}れ^{ニウシ}し^{ニウシ}切
 たり^{ニウシ}と^{ニウシ}なる^{ニウシ}此^{ニウシ}岩^{ニウシ}絶^{ニウシ}壁^{ニウシ}と^{ニウシ}て^{ニウシ}アラ^{ニウシ}ラ^{ニウシ}ツ^{ニウシ}タ^{ニウシ}と^{ニウシ}て^{ニウシ}新^{ニウシ}水^{ニウシ}の^{ニウシ}如^{ニウシ}き^{ニウシ}もの^{ニウシ}流^{ニウシ}れ^{ニウシ}る^{ニウシ}なり
 こと^{ニウシ}て^{ニウシ}り^{ニウシ}ホ^{ニウシ}リ^{ニウシ}カ^{ニウシ}ウ^{ニウシ}エ^{ニウシ}ン^{ニウシ}サ^{ニウシ}ツ^{ニウシ}ホ^{ニウシ}ロ^{ニウシ}と^{ニウシ}ニ^{ニウシ}ア^{ニウシ}と^{ニウシ}なる^{ニウシ}何^{ニウシ}れ^{ニウシ}も^{ニウシ}察^{ニウシ}鏡^{ニウシ}なり
 山^{ニウシ}頭^{ニウシ}を^{ニウシ}シ^{ニウシ}レ^{ニウシ}ツ^{ニウシ}ラ^{ニウシ}サル^{ニウシ}ヘ^{ニウシ}ツ^{ニウシ}面^{ニウシ}の^{ニウシ}源^{ニウシ}は^{ニウシ}頂^{ニウシ}上^{ニウシ}に^{ニウシ}一^{ニウシ}株^{ニウシ}の^{ニウシ}黄^{ニウシ}檜^{ニウシ}と^{ニウシ}數^{ニウシ}圍
 して^{ニウシ}枝^{ニウシ}葉^{ニウシ}卒^{ニウシ}の^{ニウシ}や^{ニウシ}か^{ニウシ}層^{ニウシ}一^{ニウシ}何^{ニウシ}の^{ニウシ}代^{ニウシ}の^{ニウシ}抽^{ニウシ}き^{ニウシ}は^{ニウシ}以^{ニウシ}て^{ニウシ}是^{ニウシ}大^{ニウシ}古^{ニウシ}計^{ニウシ}は^{ニウシ}日^{ニウシ}本
 の^{ニウシ}ニ^{ニウシ}イ^{ニウシ}の^{ニウシ}社^{ニウシ}き^{ニウシ}國^{ニウシ}と^{ニウシ}云^{ニウシ}り^{ニウシ}此^{ニウシ}地^{ニウシ}も^{ニウシ}極^{ニウシ}て^{ニウシ}試^{ニウシ}ん^{ニウシ}と^{ニウシ}す^{ニウシ}は^{ニウシ}あ^{ニウシ}り^{ニウシ}ゆ^{ニウシ}に^{ニウシ}傳^{ニウシ}ふ^{ニウシ}文^{ニウシ}化^{ニウシ}交
 サ^{ニウシ}ツ^{ニウシ}ホ^{ニウシ}ロ^{ニウシ}の^{ニウシ}土^{ニウシ}人^{ニウシ}は^{ニウシ}孫^{ニウシ}頂^{ニウシ}より^{ニウシ}察^{ニウシ}鏡^{ニウシ}を^{ニウシ}持^{ニウシ}来^{ニウシ}り^{ニウシ}人^{ニウシ}は^{ニウシ}見^{ニウシ}ん^{ニウシ}ん^{ニウシ}楠^{ニウシ}の^{ニウシ}由^{ニウシ}此^{ニウシ}は^{ニウシ}楠^{ニウシ}の

何んは不思議と云ふ事ありて他は一株の有らざる事あり

十二日快晴東岸を下る川向ヨイチバマナイ
勝江 舟中 工野山マツ口川
トラス川此不帯を折し置きたる如く大岩壁なり
舟中 ヲラツク子ナイ川
まゝ西岸ベンゲチライ川中ベンゲチライ川
崖の上 チマシバロマンベツ川 此下流より成るなり又東
岸よりニセイケマフナイ川
崖の上 此川中を流るなり大岩壁なる所あり越すイヌ
イトロマフ大崖此不帯を折し置きたる如く大岩壁なり
此より昨己の杖タルマイ越す百連一フクスケと云ふ事ありてヲカル
此不帯の上を越すタン子ハツタラ
洲の上 此不帯の上を越す事あり
頼本立敷里の東西此山を負ひ和暖なりと記す開きを烟地は頗る宜
又西岸よりエンカルト云ふ山も概本より往るなり山並著しき由りて人



標本

字深く依りて、余も此ふ極度熱結者の二子を建人とも建白を議
 ありて、香をすひててコレナイ等と云ふ宿、今日の及重經九二里位あり候事、コレ
 大程おと里を二日も懸て、一と云ふ此温泉の湯は是正人の病、コレ此温泉の湯は是正人の病、コレ
 て候、コレは湯治人もかり、コレは湯治人もかり、コレは湯治人もかり、コレは湯治人もかり、コレ
 の宿おと里、今秋に根の木も、コレは湯治人もかり、コレは湯治人もかり、コレは湯治人もかり、コレは湯治人もかり、コレ
 十三日秋、コレは湯治人もかり、コレは湯治人もかり、コレは湯治人もかり、コレは湯治人もかり、コレ
 ちの降り初、コレは湯治人もかり、コレは湯治人もかり、コレは湯治人もかり、コレは湯治人もかり、コレ
 して、コレは湯治人もかり、コレは湯治人もかり、コレは湯治人もかり、コレは湯治人もかり、コレ
 も、コレは湯治人もかり、コレは湯治人もかり、コレは湯治人もかり、コレは湯治人もかり、コレ
 腫を歩り、コレは湯治人もかり、コレは湯治人もかり、コレは湯治人もかり、コレは湯治人もかり、コレ
 又、コレは湯治人もかり、コレは湯治人もかり、コレは湯治人もかり、コレは湯治人もかり、コレ

カア、レイ

滝本と云ふ、コレは湯治人もかり、コレは湯治人もかり、コレは湯治人もかり、コレは湯治人もかり、コレ
 手、コレは湯治人もかり、コレは湯治人もかり、コレは湯治人もかり、コレは湯治人もかり、コレ
 故、コレは湯治人もかり、コレは湯治人もかり、コレは湯治人もかり、コレは湯治人もかり、コレ
 故、コレは湯治人もかり、コレは湯治人もかり、コレは湯治人もかり、コレは湯治人もかり、コレ
 故、コレは湯治人もかり、コレは湯治人もかり、コレは湯治人もかり、コレは湯治人もかり、コレ



危石、コレは湯治人もかり、コレは湯治人もかり、コレは湯治人もかり、コレは湯治人もかり、コレ
 故、コレは湯治人もかり、コレは湯治人もかり、コレは湯治人もかり、コレは湯治人もかり、コレ
 故、コレは湯治人もかり、コレは湯治人もかり、コレは湯治人もかり、コレは湯治人もかり、コレ

及、コレは湯治人もかり、コレは湯治人もかり、コレは湯治人もかり、コレは湯治人もかり、コレ

驚津宣曰
 蝦夷之俗
 古強暴而
 今柔順古
 難制取而
 今易役使
 相及如別
 種然蕃史
 曰羅利人
 往二雜居
 蝦夷之地
 日本有一
 神將擊而
 驅之蓋謂
 坂上公也
 據此則當
 時強暴難
 制取者是
 羅利人之

附錄

知別者在西蝦夷磯谷縣イッヤ距海門十餘里斷崖壁立水勢瀉瀑
 今茲五月泛舟將遡行三日許不遂志而歸再到岩內イノ衝凍雪
 披荆棘三日漸至知別河上地融泥深不能攀益岳東也
 然而雪水已漲水源難窮亦不得志而歸初間宮最上近藤三
 士雖有窮源之意不能達焉寔知此夷地為無双之險也
 安政丁巳八月念六日雇土人四名於東郊虵田到知別西崖
 此地地名令土人剗木為舟余乘其間挾持二人上河畔二日遂窮
 源而歸
 八月二日又順流而下水勢疾於矢多大石激浪如噴兩岸樹

後方羊蹄日誌

此碑の勢原風をきくと思ふ不特よき山朝の儀由也差出想
 土人一同へ厚く手あを新きし
 十四日由不土人の知り合ふも皆呼集り社を致しまの切開方圓面
 びは仕方書お認めし上よ

箱館の浦の功人開きまを開くまをのびりてなり

我を彼等の車を我も班りタカラチ甚盛をり持飲甚をふ取土人風
 流を向先始の一端をルーチンの社へと次よトカチ越神へと云よ一同は
 志ま君是かトカチへ越りまうと余も教を導りまうなり

後方羊蹄日誌 大尾

種類非本
土之俗可
知

東園評職
方地理所
不載者多
悉志樓善
述之暇夷
地記之可
觀未有過
於此書者
事開拓者
不可不讀
此等之書
也

木翁蔚不見日光、但見羆熊豺狼、又有鳥大如鷓、而頸背紅、
白背黑者、土人喚鐵哥、其餘山翠、日光、水乞鳥、花班鳥、
川鳥之類、余所未見也、夜宿察敵、綿見難、產卵、命土人又之、
忽得數十尾、其易如以手、

三日早發、到繩井茶、此地兩岸縮蹙、水尤狹、流尤急、同行皆上
岸、取糧食及食器、于舟中、各提之、虛舟順流而下、數丁、水漸廣、
流漸緩、又就舟載所提之器、有鹿以毒箭斃之、質地名于土人、
即嚮余所泊之宗附河岸也、日方頃、投宿岩內、酋長計、辦之獵
舍、去夏有人住、今也則亡、屋大廢、壁上有岡田某、題詩曰、
雲岳冰山銀世界、白雲深處別開天、一椽茅窠生涯足、疑是夷

蛇退猿愁萬仞
山溪迴石亂水
濼環方知造物
千年秘達着奇
人洩世間

長戶謹
齋



法眼永秀

翁即地仙，併去歲余所和詩亦隱，可讀曰：猿攀蟹步十餘年，霜苦雪辛千島天。健脚自期僧小角，任他人喚做蝦仙。此夜野狐欲貪我糧食，來數矣。

四日黎明發舟，水底其深不知幾千仞，水聲瀾瀾，驚耳。既而兩岸犬牙參差，土人喚之仁勢，計升摩，岩石峭立，又上食器於岸，曳舟而下三丁許，兩岸如前，如此者三次，水愈險，石出如劍矛，於是神悚胆悸，土人製木幣以祈岳神，自此土人乃繫繩舟首，引諸樹杪，舟乃立，自舳推之，弛繩則既過險矣，如此者數次，日方暮，宿斷穴底。

五日下午急流一里許，水聲瀾瀾，驚耳，土人喚之武伊羅，日暮宿

松浦生身
藏一具仙
骨加以大
胆健脚視
險危如坦
途人皆心
寒股栗生
獨堅忍不
撓山必攀
其頂巔川
必究其源
委巨細悉
筆而無一
語涉虛飾
者蓋志有
所不在而
固不暇雕
琢字句也
松園道人
誌

樹下，夜雨暴至，如傾盆，寒風砭肌，手龜衣濡，欲就火薪，温不燃，覆欬冬葉，代雨衣立，而待曉，舉頭則岳巔盡白，愈知寒威甚，以昨所捕獺肉，不熟而食之，餘肉則備午餐。

六日急流如前，余久在此險，心神殆不安，出針盤檢之，則岳北也，山皴不可辨，知離岳稍遠，日暮見小川於西方，土人悅曰：是磨碓利別也，明日必到昆保，往年蛇田土人造舟於此地，到礮谷，厥後無能至者，經宗附到于此者，開關已來，益余一人而已，豈不愉快哉，昏黑宿于此。

七日下午急流三處，到昆保河口，水勢稍緩，喚武伊羅者五而已，宿柳多。

八日抵女南、余令春到此不得志而歸、兩岸有樵夫、目余有驚色、余亦如再生、日夕到渡口、渡子亦知余者、喜余無恙、出濁酒饗從者、余與鹿皮與肉、以餘肉轉致常見某榮太於岩內港、九日抵壽都、訪長谷川儀三岡田鏡次二氏、二氏遇土人尤厚、余亦與米酒、煙艸漆器、故服以酬其勞矣、磯谷即知別之下流也、自古禁張網設梁、蓋岩內蛇田宇須三落之民、在上流而漁、故也、近歲禁弛放漁、故三落皆愁之、余所雇四名、即上流之民、懇訴之、余乃告之二氏、二氏申舊令于下流之民、令無敢犯禁、四名感謝而去、

後方羊蹄日誌附錄畢

